雨詩

夜鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨詩

【Ｎコード】
Ｎ９２０１Ｃ

【作者名】
夜鳥

【あらすじ】
鬱陶しく感じていたものに、変化が現れる。それはきっと、紫陽花に似た彼女の仕業。

1

雨の詩

「君って本の虫だね」

どんな話題をふっても無意味。
それでも飽きずに言葉を紡ぎ続けていた彼女。

『私、学級委員長だから、1人でいる子が気になって気になってね！』

という理由で、いつまで付きまとうのだろう。

入学して10日、いきなりこの『委員長』宣言された時から、この調子で早2ヶ月。
月日が経つのは早い。
もうそろそろ、いい加減にしてほしい。

1人でいる根暗なクラスメートが興味をくすぐるなら、他の生徒を追いかけ続ける事を勧めたい。
付きまとっても何も出ないし、人と何処かが違う訳でも無いし。
その好奇の瞳が求めるものは何一つ自分は持っていないという哀

しい確信もあるというのに。

「今日ね、本借りようと思うの。お勧めの本って・・・・ある？」
「ねぇ、君。これって読みやすい？　私長いの苦手で」
「その本面白いよね！　結構本好きになったんだよ。私」
「あ、此処に居たんだ。今日は」

あぁ・・毎日・・・・疲れる。

何なんだ彼女は。
何をして欲しいんだ？
人がゆっくり本を読んでる時に、

「ペラペラ良く口回るよなぁ・・・・」

と感心するようなお喋りは他でしろ。

日々の気疲れが臨界点を突破したのか。
何でかは分からないが、自分はある事をしてしまった。
今でも思い出せる。
あの出来事は、失敗か、否か。

良く分からない。

何故かそんな予感がした。
確か、校庭に溢れる程咲く紫陽花の花が、空のような淡い青に染まりかけていたのを見た時だった。

2

事件はその翌日に起こった。

6月の第3週。

曇り空、雨の降り続く憂鬱な水曜日。

いつも通り学校図書室の隅、孤立した長机に座り、一人本を読んでいた。

何度か読む所をかえていたが、雨続きでは屋内でしか動けない。

彼女はいつも、必ずやってくる。

何処かにセンサーでも着いているんではないのかと疑いたくなる程だ。

なのでもう諦めていた。

そして今日もまた、同じようにやって来た。

「やっ、君」

濡れるように光る黒髪のショートヘアを軽く揺らして、後ろに立った。

「何、読んでるの？」

ずずいっ！　と漫画調な効果音付きでページを覗き込んでくる、

真面目な顔。

これは別に嫌じゃない。

彼女の髪からは、外で降る雨の匂いがした。

髪は濡れてはいなかった。

けれどその髪が艶やかに光り、頬に足れている姿に、ふっと、紫陽花を思い出した。

彼女に見とれた。

きっと、あの花が人に例えられるならば、こんな姿を映すのだろう。

そう彼女を少し、良い意味での驚きの目で見ていたというのに、その本人は。

「あ、これ。あのベストセラー小説！」

いきなり大声で叫ぶように、自らの感じた驚きを言い切った。

…耳が痛い。

ハッとなり、すぐ彼女から目を離す。

見れば図書室の生徒少数が、『鬼のような形相』という比喩のごとく睨みつけている。

もちろん彼女は気付く事無く、

「これ、すごく人気で売り切れてるんだって。すごいよね？」

とか何とか言い出す。

買ってきたのだからそれぐらいの事は知っていて当然とか思わないのだろうか。

本を置き、眼鏡を取って目をほぐしながら大きくため息をついた。

「あっ、今ため息ついたでしょ。何か悩み事でもあるの？」

お悩み相談の相談相手役が悩みの種で・・・とは、言わないでおこう。

流石にそこまで嫌な人に成り下がるつもりは毛頭ない。

まぁ、他人から見たら既にそうなっているのだが。

「・・ふぅ」

「何、何？　どうしたの」

「・・別に何も」

そう、別になんでもない。

ただ・・自分はただ、このテンションに呆れているだけ。

ただそれだけ。

別に、いつまでも話しかけて来る彼女の熱意（？）に少し感心したというか。

なんだか胸の奥に柔らかくも暖かい感情の芽生えを感じ取り、それにまた『波乱の予感』と言うものがついている事を本能的に知ったからというか。
……とりあえず、こんな話はもうよそう。

「あ！！」

……今度は何だ。

「君、初めて話してくれたね！」

彼女は明るい茶色の瞳を歓喜の色できらきらと輝かせながら、笑う。
その笑顔の意味が分からず、自分はその顔を凝視し続ける。

「これまでいくら話しかけても、じぃーーーーーっと物言いた気に見てるだけだったのにね」

返答を返してくれたの、この2ヶ月で初めて。
と、嬉しそうに言う。

そうか。
何か言い足そうにしていた事は分かっていたんだな。

まぁ確かに。
よく考えると、これまでずっと無視していたのだ。
何で今、反応を返したのか。
自分でも理由が言い表せない。

理由を求めると深い所まで彼女に言ってしまうそうで。
吐き出してしまいそうな言葉を飲み込みながら口を開いた。

『だが、それがどうしたという』

応答を返されただけ。

只それだけ。
２０文字にも満たない言葉。
それだけに喜びなんて、感じられるものなのか？

「そんな事でも、私には十分嬉しい事なんだよ」
「・・・そう」
「そう！」

本当に、嬉しそうに。

彼女はこれまでに自分が見た事もない程、嬉しそうに笑った。
その笑顔を自分に向けていることが信じられなかった。

夕立の後、日の射す淡色の空のような、薄い青が映える瞳。
彼女の笑顔に、胸が騒いだ。
お節介で、五月蝿い。
でも、明るくて、邪な感情など弾き返してしまう様な笑顔。
彼女と一緒に居るのは嫌いじゃない。
気付かないようにしていたけれど、結構心地よかったりする。

そんな不思議な彼女。

この想いを伝えるのは、彼女がまた自分を見つけた時に。
「怖くない」は嘘になる。
「このままで」と思う気持ちもここにある。
でも彼女は、いつでも自分を見つけてくれる。
でもその自分は、今のままでは、彼女と同じ道を歩む立場にはなれない。

出来るならそうなりたい。
伝えれば、そうなれるかも知れない。
壊れるかも知れない。
造り出せるかも知れない。
その答えは５０％５０％

今のままでは満足できない。
なら、そう伝えれば良い。

そう思うのは人間の性。

だからそっと、壊れないように。
まだあやふやな思いだけれど。
未だ正確に起つ事の出来ないものだけれど。

けれど。
気付いた感情は留まる事を知らず。
1秒ごとに色が増すように、1秒ごとに空気が澄むように。

何時も彼女は、自分に何かを与えてくれる。
だから、自分も与えたい。
彼女はいつの間にか、自分の中で、生活の中で、自分の一部になっていた。

だから、手放したくない。
多分きっと手放せない。

ならば、自分に踏ん切りを付けて。
雨天が快晴になるように、切り替えて。
撥ね除けるのではなくて、受け止めるように。

この気持ちを表していけるといい。

もし、彼女が明日、ここへやってきたら。

多分きっと、意味も無いくらい緊張するんだろうけど。
話すくらいは、真面目にしても良いかも知れない。

それが自分の第1歩。

いつか伝えたら。
共に最高の喜びに巡り会えるように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9201c/

雨詩

2011年1月23日02時42分発行